

島尾敏雄

現代の文学 15

島尾敏雄

昭和四八年一〇月一六日 第一刷発行

著者 島尾敏雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号一―二

電話東京(〇三)九四五―一―二(大代表)／振替東京三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 七五〇円

©講談社 昭和四八年／落丁本・乱丁本はお取り替えします

目次

砂嘴の丘にて 7

いなかぶり 23

勾配のあるラビリンス 36

宿定め 49

冬の宿り 65

市壁の町なかで 76

摩天楼 87

夢の中での日常 93

鬼剥げ	107
島へ	115
島の果て	136
孤島夢	154
徳之島航海記	159
アスファルトと蜘蛛の子ら	188
出孤島記	200
夜の匂い	234
闘いへの怖れ	247
廃址	256

出発は遂に訪れず 267

坂道の途上で 292

死の棘 303

日は日に 344

家の中 382

ねむりなき睡眠 397

のがれ行くところ 411

卷末作家論／櫻庭孝男 426

年譜 436

装幀／横山明・依岡昭三 卷頭写真／野上透

島尾敏雄

砂嘴の丘にて

私はその時、海の中にいて浜辺に気を配っていた。しゃがめばやっと肩が水中にかくれる程の深さの所で、私は途方に暮れてしゃがんでいた。浜辺では母と折笠先生がおとなの話をしている筈であった。

私はどうしてか、ひどく途方に暮れていた。海の中から立ち上って、母や折笠先生のいる方に気軽に近付いて行くことが出来なかった。それは少しいやな気持であった。そのいやな気持は私が自分で選んだのではなく、と言って明らかに母ばかりの責任でもなさそうだが、一層私を途方に暮れさせていたようだ。それで私は海の中で立ち上ることさえためらっていた。立ち上ると浅い所なので、腰から上があらわになることが、ひどく恥ずかしいことに思われた。どこかひ弱な感じの瘦せた肩幅のせまい身体に安物の生地、薄い黒っぽい海水着をまもっていたが、肩の所がすぐずり落ちて来て気持が悪かった。からだにびったり合った充実した気分になれなかった。それにたとえそのよ

うに安物の海水着であったにしろ、その辺の海水浴場では見かけることが珍らしく、健康そうに陽焼けのした漁師の子供たちが、真っ裸か或いは白いさるまたをはいて跳び廻っているような所では、彼等と私は一様でなく、殊更にハイカラ振って海水着などをまもっているように見えることに誰にもなく居心地悪い思いでいた。その海水着は母が選び、そして母の一方的な手順で私はそれを着せられていた。漁師の子供等の一人が、私を、おいーと手荒くこづいたら、私はこづかれてたじたとなたまま、さてどう構えを持直していいか困り果てたことだろう。

海の中で私は中腰になり、身体はかくし首だけ出して、母や折笠先生の方をはっきりとは見ずに水浴びにはすっかり厭がっていた。

私は唇が紫色になっていた。海水浴の季節は外れかかっていたが、それでも海水の中に身体をつけていれば、生ぬるく、どうにか我慢が出来て、そのためにも立ち上ることが億劫に思われた。「一、もう一遍泳いで来たら何う」その母の言葉に私は縛られていたのかも知れない。私は退屈してしまつて早く宿屋に引き揚げたかった。そして宿屋の畳の上の塗膳で、何かごちそうをしこたま食べたいと思つた。それでぼんやり母たちの傍に身体を投げ出して砂などをいじっていた。母たちの話は何と止めどのないことだ。

退屈な会話がどうしてあのようにあざなわれるものか。然し私は決してその話の筋道を理解したわけではなかったの

に。私は母のおしゃべりの切れ目切れ目で母の顔を見ては、もうそこを切り上げて、宿屋に帰ることを殆んど祈る目付をして待ち望んでいたのに。母は私を何遍目かの海へ追いやった。

私は誰に腹立てようもない忿懣で、海につきりながら紫色の唇をして空を見上げた。すると、急に雨が降って来た。それはまるで不意打に、しぐれて来た。雨足にたたかれて海の上一面が菊石になり、私は奇妙に水の要素の中にはまり込んでしまい、そこから抜けきれない錯覚を抱いた。ああ、やっと母たちは浜辺から腰をあげるだろう。私も母たちの方に帰って行かなければならない。然し私は海の中で変な具合にとじ込められてしまったことに満足していた。しゃがんでいる海の中から立ち上がれば、私は雨に濡れるだろう。それは少しおかしな思い過しであった。私の身体は既に海の中で水びたしになっていたのだから。海は天からのびっしりした雨の矢に叩かれて、それまでは落着きなくうねり動いていたのに、びたりと動きを止めてしまったようで、その動きの無さの中で、私は余計に立ち上れず、母が呼んでいる声に向っても、意地悪くのろのろした態度を取ろうとしていることに気付いていた。

私は外海の荒い波濤を直接に受けとめている砂嘴の広く果てしない砂丘の中で、二人の妹と一緒だったが、砂を掌の上にすくい上げては、傾けて、こぼしていた。私は二

人の妹の言い分をきくばかりだ。自分の意見は言わなかった。というよりも言うことが出来なかった。意見らしいものが何一つ私に湧いては来なかったのだから。

砂丘は果てしないように思われ、太平洋の波が、砂丘の小高い所に白い歯をむいて向って来ては退いて行く。この何時止むとも分らぬ打寄せる波の繰返しは、私を怠惰にする。丁度滝を眺めている時と同じ作用が私の脳細胞に波及して来る。しびれてしまっても何んにも考えたくない。何んにもしたくなかった。そして波や滝に付随する音響がそこにあつた。その音響を消して、滝の落下を凍結させたり、海水を断ち割って海の底を陽の目にあらわにして見ることも出来ないで、その上私というものは一体何であったことか。そんな驕った妄想を、巡りの悪い頭で考えていた。だから妹たちの話を彼女たちに即して聞いてやっていたわけでもなかった。私は自分の顔色や皮膚の上の色々の現象について、肉身の妹たちの話をきいているような時にも、いくらかこだわらないですみますことが出来なかったのだから。自分の顔の表面を自分で見ることが出来ないことは、動かすことができぬ一つの運命ではないか。誰が、自分の顔を、自分の掌を見るように見ることが出来たらう。そのために、自分の顔の表面の諸状態について、私は確信がなかった。私の顔の表面の一寸した小さい変化さえ見ることの出来る私の対話者は、私について各瞬間に色々な感受を持つたらう。しかし私は私の対話者が私の顔の皮膚の色や

よぐれやその他の現象にふと持ったその感じを感じ取ることは、できない。でも私も亦私の対話者の顔の皮膚の感受でその人に対する態度を決めてしまうことが多いではないか。当人だけが気付かないということ。人々は自分では絶対に見ることの出来ない顔の形や色や又自分の意志に反して保っている或る状態を、あけすけに他人に開放したままである。それは造化の神の人間に対する不気嫌で皮肉な刑罰なのだろうか。私も亦、私の意志に反して、私の顔の形や色を持っている。私は二人の肉身である妹たちの顔を見る時に一層強くその不如意を感じた。

私たち三人は妙に力が抜けていた。自分たちの力ではどうすることも出来ない事にぶつかって、而も何か私たちの側に罪か或いは過失があったような狭い出口のない黄色の部屋の中に閉じ込められた気分で、その砂丘に坐り込んでいた。

私たちの気分がそんな風に、ひどくせばめられているのに、波濤は限り無く砂浜に打寄せては引返し、砂丘の長さ私の眼に果てしなく映っている。実際は地平線に近く紫にかすんだ断崖の所迄しか続いていないが、私には手がとどかなく感じられた。砂に足をとられ、不自然に股に力を入れて歩いて行っても、私はその長い砂嘴の砂浜を縦に渡り切ってしまうことが出来ないような気がして、恐らくそのように砂丘を地平線の断崖の所迄歩いて行くことは今後

も私の生涯の中にはないだろうという無縁の感じに裏打されて、一層私たちを頼りな気にしていた。

私たちにはどんな生活の楽しみも残されていないと思ひ込んでいたように思う。私たちがそのように頼り無げであったのは、私にも妹たちにも、太陽の陽が、もう強烈に照っては呉れないだろうという気持ちにさせられていた。その日の朝方、私たちは海水浴場の海廻の宿屋で、折笠先生の娘の匡子の死の報せを受けなければならなかったから。

私たちは遠い都で生れ、成長しそして暮していたが、私たちの父母は辺鄙な地方の農村で若い時代を過した。私たちが「いなか」と呼んでいる場所が、父や母が生れ育った所だ。そのいなかには両方の祖父や祖母、おじやおばたちの生き残った人々が住んでいた。

私たちにその時までには、毎年やって来る暑中休暇の度毎にそのいなかに「帰って行く」ことは少しも疑われずに繰返されて来たが、そこが本当に私たちにとって、帰って行くことの出来た場所であったのかどうかを、私は知っていなかったようだ。眼の前に無秩序に、そしてしつこく現われる沢山の現象に嫌悪するだけで、多くの日が流れ去り、過ぎてしまう。振返って見ると何という口惜しい日々であったろう。而も私はその時々には、窒息しそうな程にも沢山の現象に即物的であったのに。

私たちの母は死んでしまった。それでもまだ私たちは疑いもせず、母の生れた生家にやって来た。私たちにどんな保証があつて、かつて子供であつた時と同じように、真夏の太陽が輝くばかりの暑熱を感じさせて呉れることを期待出来ただろう。

私たちが折笠先生を思い出したのは、いくらかは世間に向つての眼が智慧付けられたからであらうか。太陽の光線が皮膚に充足しては感じられなくなつて、ふと肌寒い間隙が感じられたからであらうか。私たちは誰に許容されて三度の食事の席に連なることが出来るのか。

私は母を強く身勝手に思い出した。あの浜辺での夏も終りに近い或る日の風景が思い出された。此の度も私はかつてのあの日の場面の想起とも関連させ、折笠先生を訪問してみようと思ひ立った。然し私はあの場面が意味する事実は何にも知らない。死んだ母が私たちに、「母さんの「ロマンス」と前置きしてその人のことを話して呉れたその程度に於いて、だるいように変化のない私たちの人生にも、多少は修飾してみることに出来る生活もあつたのだという快さに酔つていただけだ。私は母のそのものがたりの中で、あの夏の浜辺でのごとがどんな位置を占めているかに、はっきり気付いてはいない。然し、私は「母のロマンス」の継承者になつていてもいいという甘い考えを捨て切れなかつた。母は私たちに對して、折笠先生とそのものがたりを完璧にガラス函の中に密閉してしまつたので、骨董品の

ようにいつでもガラス函を取り出して見さえすれば、その楽しさを再現してみせることが出来ると思ひ込ませることに成功した。だから私たちはそのことを誰にでも、父の前でさえも、平気で話題にすることが出来たほどだ。父はそのことに對して全く無関心であるように私には見えた。勿論、父に對して母が子供たちにそのことを平気でしゃべらして置いてもいいような、何か理由があつたのだからかということにも、気がついてはいなかつたのだが。

折笠先生は大学生だつたという。そして母は、二人の赤ん坊の母親であつた。然しそれは何と若い母親であつたとか。母の年齢は、私のその時々年齢に丁度二十を足せばよかつた。母は何かの所で、いなかへ帰る汽車に乗つていた。そして折笠先生は休暇で帰省する途中であつた。乗客のあまり多くない車内でのその座席には窓際に向ひ合つて母と折笠先生が腰掛けていただけであつた。海岸沿いの支線なので、目のさめるような鮮明な海の青が時々窓のわくの中一ぱいになる。二十歳を少し出たばかりの私の母はどんな着物を着ていたのだからか。又髪をどんなかたちに結つていたのであろうか。偶然に乗り合わせている向い側の大学生の眼に、赤ん坊の私に乳をふくませる姿勢を見せたのではなかつたか。母はその頃の生活に幸福だつたのだろうか。折笠先生は書物を読んでゐた。私はようやく画かれてゐる動物が何であるかを識別する程になつてゐた。

私は「うま、うま」と齒の生え揃わぬ口で発音しながら、折笠先生の見ている本の方に手を延ばして行った。私は多分母の膝の上に居た。母は恐らくは、どの母親でも殆んどがそうであるように、口では、「坊や、よそのおじちゃんまのご本をおいたしてはいけませんよ」と言い乍ら、かなり凶々しく自信のある間のびした態度で、私のいたずらを許容していたのであろう。折笠先生は何んな本を読んでいたのだらう。動物学の教科書のようなものだったらうか。そして彼は不幸だったのだらうか。それだけのことで、彼はどうして私のような赤ん坊さえ出来てしまっている私の母に、結婚を申込んだのだらう。

私が母に与えられているデーターはそれだけだ。物覚えのついた頃から、毎年その季節になるときまつて折笠先生から送り届けられる季節の品の贈り物があるのを私は経験した。子供の私は、そのことは又どここの家でももある当り前のことで、ただ折笠先生からの贈り物がたとえばすぐ食べられるお菓子だとか、見て面白い絵本などでないことが不満で、厭きもせず、来る年も来る年もそんな無駄なことをしている折笠先生という人が、ひどくやばった人のように感じられた。その頃の私は母を少しも美しいと思わなかった。母の容貌について、ただその美醜に関してだけは私は悲観的であった。その母の血を享けて生れた私たちは、その点では不幸な巡り合わせを背負っているのだと思

っていた。そんな私の母に対して、働きかけている一箇の男性の存在ということが理解出来なかった。母が時々繰返すそのものがたりを、私は少しいやに思いながら聞いていた。それは又別な時母が私たちに話してきかせる父と結婚をする前後のことを聞く時にも感ずるいやな気持ちにも通じていた。然し私たちは母を是認していた。ただ母のそういう話を、私はもつとふくらみのある意味を持たせて理解することが出来なかった。

私が始めて折笠先生という人に会ったのは暑中休暇でいつものように私たちが、「いなか」に帰っていた時のことだ。私は尋常科の一年生だったように思う。その年のいなかへは私と上の妹の二人だけが行くことになった。そして母は、いなかに居る間のいつか一日を折笠先生の所に遊びに行くことを私たちに約束させた。

ある日私と妹は、祖母に連れられて、折笠先生の家を尋ねた。

その時の私は、母の疑いのない口ぶりに支えられていた。だが気はすすまなかった。その場合むしろ祖母の方から積極的に私たちは連れ出された。何かの縁故から祖母は折笠先生の人柄について、聞き知る所があつて、心を動かしていたような所があつた。祖母は、私の母と折笠先生とのいきさつよりはむしろ、折笠先生の家が、太平洋の浜辺寄りのその地方での昔からの古い家の一つで、彼の伯母の

かねという人と、若い頃にかなり親しいつき合いをしたことに、なつかしさをあおられたようであった。その人はもう大分前に死んでいたが、祖母はおかねさんの実家の様子と、その甥であるという折笠先生を一度見て置きたいと思つたようだ。

祖母と私と妹とは、私たちのいなかの駅から二つか三つ目の駅で汽車を下り、駅前から小さな町中を通り抜け、町外れの踏切を渡ると、見渡す限りの田圃のある風景の中で、下駄の底に吸いつきそうな砂ぼこりの白っぽい県道が、乾き上って行手の森かげの方に伸びているのを見た。

私たちはその白い道を乾ききって歩いて行つた。

夏休みで、いなかに戻っている間は、概ね私は自由な思いをしたが、然しどうしても果さなければならぬ義務が二つか三つかは負わされていた。例えば父の方のおじやおばたちの家々を廻らなければならぬこと。私はそれがあんなに自分にとって嫌悪されていたことが滑稽なことに思い返される。私とその嫌悪の様子を露骨にしてみせる程、祖母や、そして母も、私をたしなめながら喜ぶことを私は知っていた。私は折笠先生の訪問もその年の夏休みのいやなおつとめの一つに数え挙げていた。

私と妹は、よそ行きの洋服を着なければならなかった。それは特別にそういう日のために都会の母から用意されていたもので、祖母は私たちにそれを着ることを強く要求した。然し、私はそれを着ることを好まなかった。はでな縞

模様の羽二重地のシャツ、そして妹は同じ生地（まじ）のぞろりとしたワンピース。明らかに一つの反物から分けて作つたところが歴然としていて、そのようなはでな服装を、私たちのいなかでは殆んど見ることが出来ない。その為に私たちは、いなかの子供たちの揶揄（やげう）の的になつたものだ。そのよそ行きを着ている時の私と妹は、広い道や町筋をさけて、人のいない鉄道線路や田圃道を選ばなければならなかった。その日は祖母がついていたので、いくらか肩身のせまい思いをなくすことが出来たが、見馴れた妹の都会くさい、羽二重地のワンピースや眼元深くかぶる帽子などの恰好が、いつものことながらももう少しどうにかならないものかと思つていた。私は自分の妹を醜（みにく）いと思ひ、そのいくらか大人びて見える切れ目の長い眼許や、口許の勝気そうに引きしまった塩梅の美しさに気付くことが出来なかった。彼女のえくぼさえ私は醜（みにく）く思った。彼女の気安げな大胆さを低脳（ていなん）のせいにしていた。子供の私は、彼女がいつまでも私の為には荷厄介な付属物のように此の世の中にあつて私の傍にくつついて邪魔をしているように思つていた。

どんなに長い白い道を歩いたことだつたらう。その長い道の途中には氷水屋もラムネ屋も見つけることが出来なかつた。そして私たちは再び負わなければならぬ帰途のその苦勞にうんざりした気持で折笠先生の家に辿りついた。折笠先生は中学校の教師をしていた。それで私たちは、

彼を先生と呼んでいたのだが、丁度折悪しくその日先生は学校の慰安会で、夜遅くしか帰って来ないということであった。

その日私は折笠先生の家のたたずまいから、或る深く打たれるものを感じた。不幸な静けさのようなものが、彼の屋敷うち一ぱいにみなぎっていた。その屋敷は白い街道筋から坂道の誘道で引きこまれた小高い所に、よく手入れのとどいた丈高の生垣ですっかり囲まれていたが、そこにだけ通ずる細い坂道を登って行く時に、既に訪問者に一種名状しがたい憂愁の感情が、起って来るようであった。

その日の訪問の印象が、こんなにいつまでも私の心に焼きついているということは恐ろしいことだ。西も東も分らない年頃の私が、たった一回訪ねただけで、或る型の家のたたずまいと、或る型の人間の気配とについて、固定観念のようなものが出来上ってしまった。

こまかなことは忘れたが、ただ二つのことが記憶にあざやかだ。それはその屋敷には蠅がいなかったこと。その夜は折笠先生の掃箒が遅くて私たちは先生の奥さんに強く引留められて泊ったのだが、夜中に私は強いおとなの体臭に眼を覚ましたこと。彼は宴会で酒に酔って来た。おかしなことだが、それは私の期待に合致したのだ。私の母のこしらえごとで折笠先生は不幸な人でなければならなかった。彼は生ける屍のような毎日を鄙びたいなかの旧家で、希望

を断ち、運命への消極的な復讐の生活を送っている筈であった。それで彼が泥酔して帰って来たことは、いかにも似つかわしいことに思われた。やっぱりそうだったのだ。私は熟柿臭い折笠先生に違いない人に抱き上げられたのを知っていたが、何か未知の人への恐怖と、寝ている所を酔っ払いの騒々しきで眠りから引き戻された不快と、私が折笠先生を考える時につきまともっている或る気分の為の羞恥とで、臉のうらをわななかせつつ眠りを装っていた。

「……………」

折笠先生がその妻に何か言った言葉に、又私は恥ずかしい思いをした。それは何か子供である私の無心を美しさのようなものに対する彼の詠歎の言葉であったようだ。然し実際は私は狸寝をしていて、眼を覚して彼と初対面の挨拶をすることが億劫な気持と、おとなが子供の私に抱いている感じを崩してしまつては悪いだろうという心遣いで、殊更に身体をぐったりさせ、しばらくは、彼の毛むくじらの、と感じた腕の中で、見透かされはしないだろうかというおののきと闘っていた。それにしても、折笠先生の奥さんは、何という可哀そうな人なのだろうとその時の私は思ったのだ。

「あなた、起こしてしまいますよ。そんなに……」

その言葉からは、何かしら世間というものからの私に対する批評に似たものをかぎつけてみるだけで、折笠先生とその妻との毎日の生活のどんなかげりもひき出すことは出

来なかった。

あわただしく小さな嵐が過ぎ去ってしまったように、いつのまにか私は再び眠りの中に陥ち込んでいた。

翌朝眼をさましてからの、私のちぐはぐな気持を調整する為の努力は、私を一層無口にし、おしゃまなものに見せかけていたであろう。あれ、こんな人だったのかしらん。

顔のひげが美しく剃られて青く見える。血色のいい顔の人。眼が象のそのように細くてやさしく何処にも荒廃の気配など見えはしない。昨夜お酒をのんで来た不幸な人の面影など、何処にも留めていない。そして奥さんとのおだやかな応待。

私ははぐらかされていた。だから一層完全に振舞おうとして、私は折笠先生が大事にしていたレコードをふみ割ったりした。すると彼は、私の戸惑いするすきも与えずに、こわれたレコードの残骸を私の見えぬ所にあわてて押し込んでしまった。私は自分の勘定の彼からの借方がふくらんで来るように思った。然し救済されている感じを植えつけられたことも事実だ。

匡子はまだ小さかった。一言もものを言わない子。私は彼女を美しいとは思えなかった。彼女が私に美しく見えれば、私の小さな世の中がふくらんでくる期待が持てたのに、私に彼女の美しさは見えなかった。口もとのとがって見えたのが、私がいつも厄介で美しくないものに感じていた私の上の妹の、ひねくれの気性に似ていると思ひ、失望

した。頬の赤いのは、いなかっぺいだと思えた。

私の母がこしらえ上げた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった。私はそういう智慧を覚えて帰ったのに、何故かその日のことが強く脳裏に刻みつけられてはなれない。

何だつて又私たちは折笠先生の所を訪問してみる気になったのだろう。何か魔物に魅入られた具合に、私たち三人は折笠先生の村にやって来た。私は大きくなって来た。あらゆるものの意味が理解出来そうだと考えていた。然し何も分つてはいなかったのではないか。気構えだけは、いつでも事件の渦中に飛び込んでみせることが出来ると思っていたのだが。

いくらかはその気負つた気持で、折笠先生の所を訪問してみる気持になったのだろう。何かに甘えた気持と、又何かを見極めて、自分が招待されているのか拒絶されているのかをはっきり知りたい気持。私は二人の妹を連れて折笠先生の所に出かけて来た。上の妹は、かつての日に祖母に連れられて私と一緒に折笠先生の屋敷を尋ねて来た。妹はそれについてどんな彼女自身の記憶があるだろう。私はかつての日の彼女は、私に向つても意志や感情など少しも示さず、ただ子供っぽいひねくれだけを持っていったと思ひ込んでいる。下の妹については尚のこと分らない。ただ上の妹よりはもっと私に対して批判的であるようだ。